木のおもちゃに魅せられて18年

（その1）

木工塾「といこうぼう」　主宰　　伊　藤　英　二

広がる木の文化と手づくりの輪

手づくり運動が、すばらしい出会いとドラマを生んで

このごろ，よく木の枝や木片で作った鉄砲や刀などを振り回しながら，夢中になって野山を駆け回った50数年前や，子どもたちと共に自動車や汽車作りに励んだ教員時代を思い出します。それだけ年をとったのかと思う反面，私の60数年の人生の中で，あの工作少年時代に味わった作ることの喜びと感動が，今もって私の創作意欲を駆りたててくれるエネルギー源となっていると思います。

木のぬくもりと木目の美しさに魅せられて，木のおもちゃを作り始めてから，かれこれ18年になります。

障害児教育の一環として，子どもたちと一緒に始めた木のおもちゃ作りですが，今では私のライフワークとなり，作られた作品も3,000点近くになりました。

展示会の搬出で，トラックいっぱいになった遊具や玩具の数を見るたびに，ずいぶん作ったものだと我ながら感心していますが，それも私が木のおもちゃ作りを職業としてでなく，工作少年をそのまま大人にしたような木工好きの教師が，手づくりの楽しさと感動を子どもたちに贈り伝えたいという願いと，その創作活動の中で出会った大勢の人々の願いが一緒になって作りあげられたと言っても過言ではないでしょう。

1981年，仲間たちに励まされ，子どもたちと共に作った200点余りの「手づくり木のおもちゃ展」を北見のNHKぎゃらりーで開催したのをきっかけに，今では，「みて，ふれて，作って，遊ぶ」展示会を南は九州の大分から，横浜，東京，金沢，北は根室と全国各地で催していただいており，手づくりのおもちゃを通して，そこにはすばらしい「出会い」がありました。

今，木という素材の見直しと，手づくりの大切さが静かな広がりを見せてきました。

展示会や手づくりおもちゃ教室，講座の中から，全道各地に木工サークルや同好会が誕生しました。創立10周年を迎え，すばらしい作品と幅広い活動を続けている下川町の創作集団「北創」，夏・冬とおもちゃ王国を開国としている**生田原町安国木考研究会，町内外**の展示会，町のイベントづくりに積極的に参加している地元**留辺蘂町の「もくもく倶楽部」，そして美幌，弟子屈，標茶……と，いずれも木工芸講座の中で木肌**のぬくもりと木目の美しさと手づくりの楽しさに魅せられた人々の集まりです。

人口1,280数人という全道一のミニ村，**西興部の村**中に，全天候型の屋内遊園地とトイシアターをもつ

はじめの頃の展示会

工房内での「手づくりおもちゃ教室」

「ウッドミュージアム・森の美術館」が今春（1996年）着工のはこびになりました。また，かっての勤務地であった生田原町では，ウッドクラフト講座から発展し，木工房「ピノキオ館」のオープン，そして1997年秋には，世界の木のおもちゃを集めての「おもちゃ博物館」の建築計画，地元留辺蘂町でのウッドクラフトマンハウスの建設，さらに，北海道立林産試験場のコロポックル，旭川市内の新興ショッピング街の新店舗に開設されている木製玩具遊具ゾーン……等々。

はじめは，子どもたちやサークルの人たちの体験を大事にしながら，共に作ることの楽しみを追求していましたが，展示会や木工講座を通した新しい「出会い」や「ドラマ」が，私自身の創作活動と関連しながら，様々な人々の心と結びつき，大きな夢とロマンが確実に広がりを見せてくれたのです。

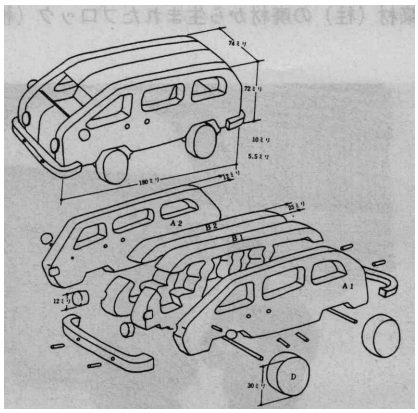
障害児教育の中で，木っ端（はざい）材を用いた木のおもちゃ作り

私は1956年春から中学校の教師になりました。社会科の教師ですから，木工芸（美術）の分野では全く専門的な知識や技術はなく，作りながら身につけていった自己流です。

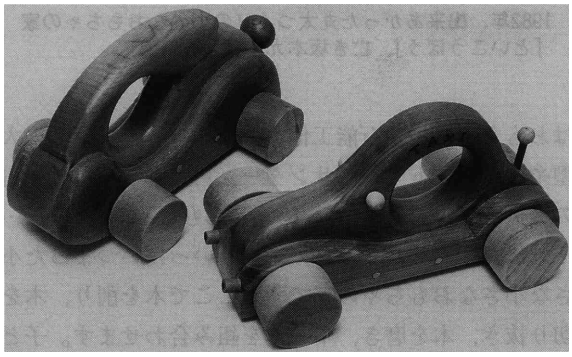
1977年から，特殊学級と呼ばれる障害を持った子どもたちの担任になりました。子どもたちに意欲と自信を育てたいという願いから，手先を通して身体の訓練と集中力，根気力の養成，成就感のある教材をと，木のおもちゃ作りを取り入れました。

学校の所在する留辺蘂町は林業の町だけに，木材加工場も数多くあり，各家庭には燃料用の木っ端とよばれる**端（はざい）材が軒下に積みあげてありますので，それらを**提供してもらって，木っ端積み木や自動車，汽車などのおもちゃ作りが始まりました。教室にある道具と言えば，古い卓上型ミシンのこ，ハンドドリルだけですから，薄い板を何枚か木工ボンドで張り合わせて，ブロックを作ったり，つなぎ合わせて広い板にして用いていましたが，どうせ張り合わせるのなら，その形に切り抜いてから張り合わせた方が効率的であることに気づいたのです。つまり，現在の私の作品の主流をしめる“集成材方式”の加工法が生まれたのです。

張り合わせ方式ですから，形にとらわれず，また色

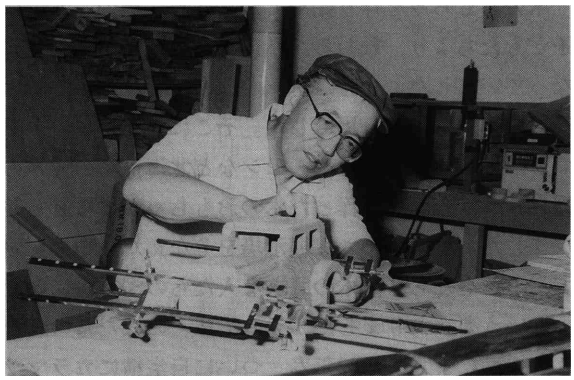


コンパクトワゴン車組み立て図



木っ端材から生れた「ハンドカー」

7～8枚の板を「はり合わせて」作ったクラシックカー。
横の白いラインもサンドしている。



製作中の著者

障害児学級の子どもたちの作った作品展示会

端材から生まれたおもちゃ

木っ端材から作られたいろいろなおもちゃ。障害児学級で

建築材（柱）の廃材から生まれたブロック（積木）

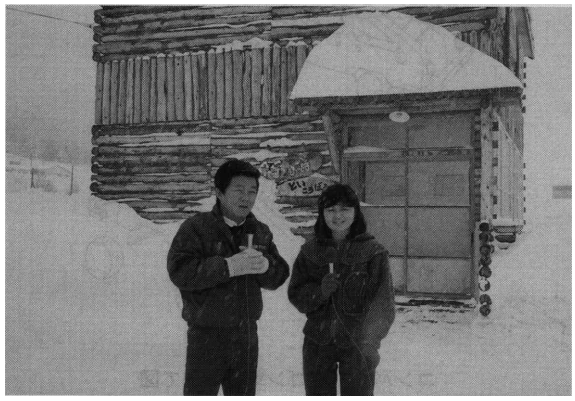
の異なる板をサンドすることによってカラフルな作品に仕上がります。板材を用いて箱物を作るのとは異なり，作品の発想が広がります。また，割れ，節，あて材などの廃材も使い方によって個性を発揮します。

これらのことを，障害児教育の実践の中で学びとることができました。

創作活動の拠点

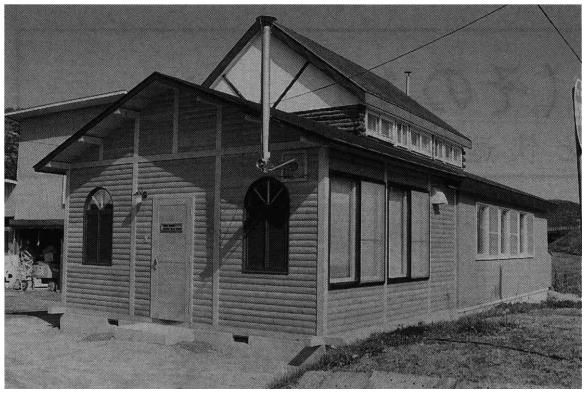
おもちゃの家「といこうぼう」の誕生

木のおもちゃを作り始めてから5年，そのころには子どもたちより，むしろ,私自身がすっかり木の虜（とりこ）になっていました。当時は車庫が仕事場で，自宅二階の客間がおもちゃ置き場でした。そこにカラマツ，トドマツ，エゾマツ，カツラ，センなど北海道産の樹木の端材を張り合わせて作った木のおもちゃがずらりと並びました。将来は小さな展示場をそなえた仕事場を建て，子どもたちや，木の好きな人たちの溜（たま）り場にしたいという夢がありました。そして多くの人たちの励ましと援助により，1982年春，ついに自宅横にカラマツの間伐材で囲んだ小さな家として完成しました。1階



1982年，出来あがった丸太づくりの小さなおもちゃの家「といこうぼう」，亡き坂本九ちゃんも来館

はおもちゃ工場，万能工作機，スクローラー1000の大型糸のこ盤，ドリル，サンダー，バンドソーなど中古の機械を含め一通り揃（そろ）え，2階はおもちゃの展示室…それは，子どもたちと私の未来がいっぱいつまった小さな小さなおもちゃの家です。ここで木を削り，木を切り抜き，木を磨き，木と木を組み合わせます。子どもたちに手仕事を通して，木のぬくもりと，作る喜び



三期工事で完成した現在のおもちゃの家，2階部分が古い工房

スタジオ内部

をしっかり身につけてあげたい。そんな願いがいっぱいつめ込まれて，おもちゃの家，「といこうぼう」が誕生したのです。

現在の工房は，私の退職した年（1990年，工場拡張）と1992年（スタジオ増築）の3期計画で一応完成したものです。 （つづく）

伊藤英二氏のプロフィール

1932年　北海道留辺蘂町に生まれる。
1956年　神奈川大学法学部経済学科卒業。
〃　上湧別町立中湧別中学校教諭。
1974年　文部省海外研修に派遣（オーストラリア東南アジア）。
1975年　東ヨーロッパ芸術教育シンポジウムに参加。
1977年　留辺蘂中学校障害児学級担任教師。木の玩具を教育課程に取り入れる。
1982年　おもちゃの家「といこうぼう」設立。
1988年　青函博にメルヘンウッドステージ「木夢の島」を出展。
1990年　留辺蘂中学校教師を退職。
1992年　コム博（札幌）に「木夢の島」を出展。
〃　北欧4か国（デンマーク，スウェーデン フィンランド，ドイツ）の木の玩具作家を訪問研修（北海道から派遣）。
〃　北海道教育大学旭川・釧路校の非常勤講師。
1993年　アメリカ西海岸の木工家を訪問研修。
〃　メルヘン・ウッドワールド「木夢の島」を東京大手町の逓信総合博物館で開催。
1994年　同「木夢の島」を箱根彫刻の森美術館，大分，横浜，日立の各市および北海道各地で開催。
1995年　同「木夢の島」を金沢，旭川，釧路，名寄の各市のほか各地で開催。いずれの会場も大盛況。
〃　「世界のおもちゃと教育展」（旭川）に出展。

1992年から毎年7・8月に開催する，林産試験場と北海道林産技術普及協会主催の「木のグランドフェア」に「伊藤英二の遊びの世界」コーナーを設置。また，「 子ども木工作品コンクール 」の審査委員も務める。